

岡崎栄松教授退任記念論文集の刊行にさいして

経済学部長 奥 地 正

岡崎栄松先生の定年によるご退職にさいして、『立命館経済学』において退任記念論文集を特集し、ここに刊行することになりました。

岡崎先生は1996年3月31日をもって、定年によって立命館大学教授の職を退かれます。先生は1957年4月に、27歳で立命館大学経済学部の専任講師に就任されました。それ以来今日まで39年の長きにわたって、立命館大学および経済学部の発展のために尽力してこられました。この間の先生の多大のご功績をたたえ、そのお人柄を敬愛し、ここにささやかながら記念論文集を編集・刊行し、先生に贈呈することになりました。

岡崎先生は1930年に香川県は坂出市でお生まれになり、戦後、旧制の第六高等学校（現岡山大学の前身）を経て、1950年に東京大学経済学部に入學されました。東京大学では当時、経済学部開設されていた一連の講義科目——舞出長五郎教授の経済原論、高橋幸八郎助教授の経済史、大河内一男教授の社会政策、宇野弘蔵教授の恐慌論、山田盛太郎教授の農政学など——を受講されながら、とくに宇高基輔助教授（当時）のもとで再生産論＝恐慌論の研究に力をそそがれました。卒業後は東京大学社会科学研究所の助手（ソ連部門）に就任され、4年間勤務された後、1957年に立命館大学に専任講師として赴任されました。以来39年、1959年に助教授、1968年に教授に昇任されましたが、この間一貫して経済原論の担当者として学部および大学院の教育に当たられる一方、研究面ではマルクスの『資本論』の研究を中心に業績を積み重ねてこられました。

岡崎先生は1965年10月からほぼ1年間、英国はロンドンに留学され、主として London School of Economics において研究に従事され、国際的な研究交流を果たされました。

また、この間、岡崎先生は助教授に昇任された後、愛媛大学文理学部（のち法文学部と改称）の集中講義（科目は経済原論）を隔年で応嘱され、その後は同じ「経済原論」を関西大学商学部、甲南大学経済学部、同志社大学経済学部などで講義してこられました。

岡崎先生のご研究の一端を紹介すれば、先生のご研究は、何よりもまず『資本論』の基本をなす労働価値説の形成過程に向けられました。先生は本学に着任直後に発表された論文、「価値論および分配論におけるアダム・スミスとリカードウ」（上・下）において、マルクスの労働価値説の形成に関わって、とりわけアダム・スミスがもつ意義を鮮明にされ、労働価値説の理解を深められました。また、マルクスの『経済学・哲学手稿』における「疎外された労働」概念が『資本論』の各概念に対してもつ意義を解明されました。こうした『資本論』の研究に関わる広範囲にわたる、さまざまな業績は、1968年に『資本論研究序説』として出版されました。

その後、エンゲルスの研究にも向かわれ、エンゲルスの『国民経済学批判大綱』における、その後のマルクスの剰余価値概念につながる叙述等を解明されました。また、古典派経済学における労働価値説の「つまずきの石」となっていた生産価格について、アダム・スミスがどのように認識していて、それを理論上どのように取り扱ったかを詳細に検討されました。

1980年代、大変残念なことに、先生はご健康のリズムを崩され、おおむねお仕事を中断せざるをえませんでした。しかし、幸いにも最近では復調され、初期マルクスの研究をさらに進められ、再び執筆を進めておられます。

一方、先生は『資本論』の普及と経済学教育のために尽力してこられました。この面については、本学着任の翌年、1958年に出版された『経済学講義』にはじまり、『資本論を学ぶ』（全5冊）、『解説資本論』（全3冊）の編集・執筆にいたる、さらには辞典類の編集にも及ぶ膨大なお仕事を展開してこられました。この間の先生のお仕事は著書8、論文等30余に結実しています。

この間、先生は学界では経済理論学会や経済学史学会の役員を長年にわたって務められ、学内では経済学部長、図書館長、評議員等を歴任されました。

今日、21世紀を目前にして、これからの大学における研究と教育、そして経済学と経済学部の在り方について、根本的な問い直しとそれにもとづく抜本的な改革が必要となっていると思われまます。こうした時期に先生がご退任になることは経済学部にとって誠に惜しい限りではありますが、これも時の定めでしょうか。私ども経済学部教授会は、先生の長年におよぶご功績に対して名誉教授の称号をお贈りすることによって、私どもの微意を表したいと考えます。

今後とも一層のご指導とご鞭撻をお願い申し上げますとともに、先生がご健康に十分に留意され、新たなご活躍を展開されますよう心から祈念して、送別の言葉といたします。

1996年2月